

浄土

2
1994

エッセイ

中島教之 冬島菖太郎 千葉勇作

旅

新春を往く 夏 攸吾

好評連載

利根川 裕 吉川英明

ホスピス訪問記

Kさんとの対話 藤木雅清

仏教とエイズ

戸松義晴



法然上人鑽仰会発行

心 行きかう道標。



優しい気持ちに戻って、

大切な人と

話したい時間がある。

人と人との思いやり、

心をこめてかわす会話。

毎日の暮らしの中の道標。

0088はあなたにとって

そんな存在になりたいと

考えています。

ますますおトクになりました。

0088はご加入にかかる費用も、基本料金も無料です。

お申し込み・お問い合わせは、日本テレコムお客様センターへ

フリー
コール  **0088-82(無料)**

または

 **0120-0088-82(無料)**

● 受付時間 9:00～23:00 (年中無休)

日本を楽しくする電話

0088

春を訪ねて

写真 夏 攸吾

新春を呼ぶ香り、京都水尾の柚子



青森県鯉ヶ沢町の養殖イトウ



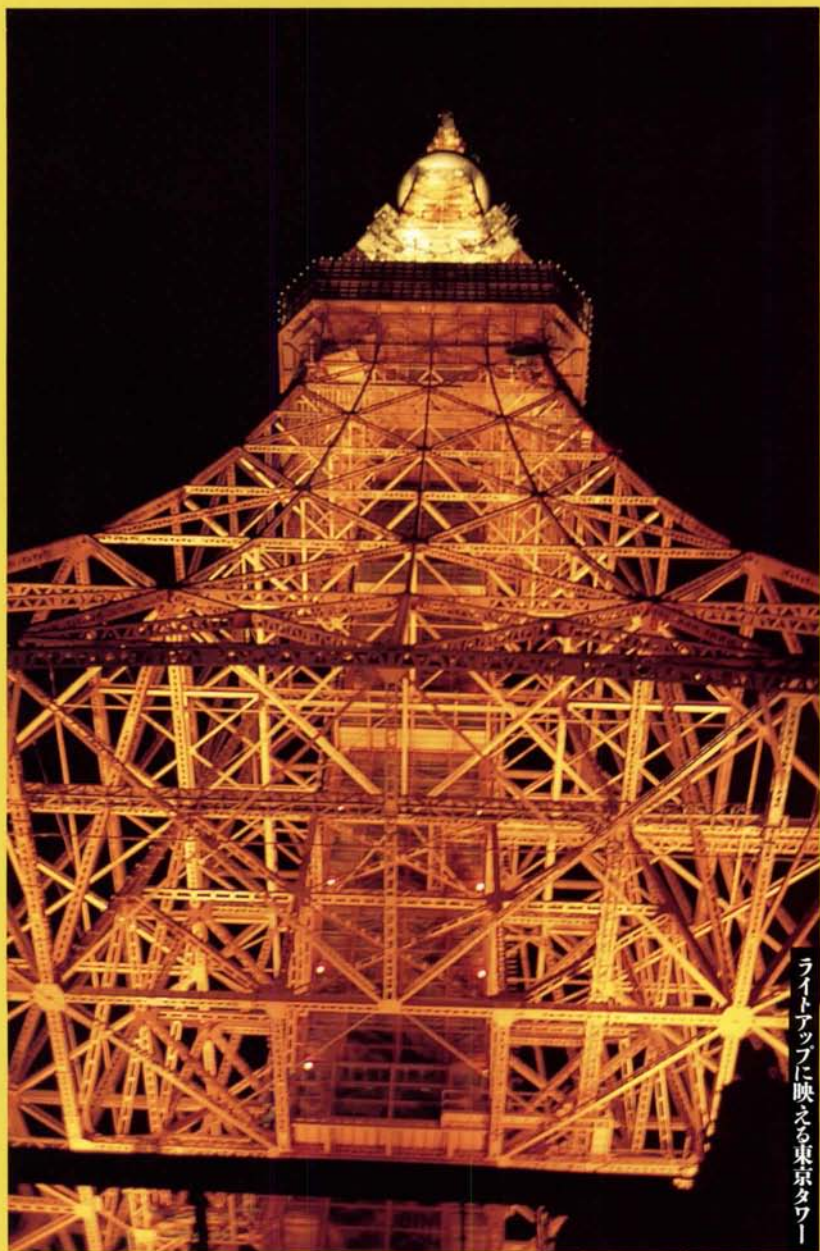
津軽、冬の日本海



早い春、南房総のホビー花摘み



東京港の新名所、レインボーブリッジ



ライトアップに映える東京タワー

浄土

1994/2月号



目次

[カラー口絵]春を訪ねて……………写真=夏 攸吾	3
冬構え……………中島教之	8
旅の話……………冬島菖太郎	12
新春を往く……………夏 攸吾	18
テレビキャスターのアンクル——①	
テレビが作った三世相……………利根川 裕	26
生きる……………千葉勇作	32
午後の日差しの中で——②	
めぐり会い(二)……………吉川英明	42
仏教とエイズ—エイズから何を私たちは学ぶべきか 戸松義晴	50
私のホスピス臨床訪問	
Kさんとの対話から……………藤木雅清	60
編集後記……………	70

表紙題字=浄土門主 中村康隆 猊下

表紙撮影=落合泰三

目次・編集後記イラスト=田村直巳

冬構え

中島教之



旅の人生を生きた人たちの中で、もっとも心
ひかれるのは種田山頭火である。

大正十四年二月、ふとした事件をきっかけに
出家得度した山頭火は、肥後の片田舎にある味
取観音堂の堂守となった。しかし、そこの山
林独住の生活にも堪えかねて、翌十五年四月に
は「解くすべもない惑ひを背負うて」という言
葉を残して旅に出た。それは、一笠一鉢をたず
さえての、乞食坊主の風体であてもなくさま

よう行乞流転の漂泊の旅立ちであつた。

この頃の山頭火の旅には、どことなく構えが
あり、旅慣れてないことのぎこちなさもある。
そして何より、

捨てきれない荷物のおもさまへうしろ

の句もあるように、捨て果てるべき荷物を捨て
きれず、旅ゆくおのれの肩に背負いこんでは、

その重さにあえいでいる様子がうかがえる。

ある意味で、人間の一生は捨てることに始まり、捨てることに終わるとは言えないだろうか。

生まれて来るとき母の身体を捨ててきたわれらは、死ぬときはおのれの身体を捨ててゆかねばならないのである。何もかも捨てきって終わるのが人生なら、その途中におけるいとなみの大事もまた、捨てるべきものを捨てていくことにあるような気がするのだが。

最近こんなことがあった。

あるところで、われわれ仏教徒としては、このあたりで「頭陀行」の精神からも「清貧」のことを考えてみようと言ったら、その場にいた多くの人に、自分としてはそこそこに富める暮らしをめざして日々には汗している。だから、自分としては欲望を否定するのではなく、あるも

のはあるものとして肯定する道を行きたい、と返された。

いま、私たちはほとんど限度を知らない消費と飽食の生活環境を生きている。さすがにこのところの景気の低迷から、一時の消費は美徳といった傲慢とも言える思いがりは姿を消したものの、相変らず豊かな社会を生きていることまで否定することはできないだろう。だが、この豊かな社会にあって、私たちは本当に幸福といえるのだろうか。

むろん、清と貧とは別のものであり、清ならざる貧もあれば、清なる富もあろう。そこで単純に、貧が清で富が濁というわけにはゆかず、また、仏教は否定の道ばかりでなく、あるものがあるがままに肯定してゆく道もあるのだから、欲求を肯定する道も仏教徒にもないわけではない

いが、だからと言って、これまでただ走るだけ走ってきた「富への道」をそのまま肯定するわけにはいけないと思うのだが、どうだろうか。

ところで、捨てようとして捨て得なかった山頭火の荷物とは何か。

周知のように、山頭火の一生は家を捨て、妻子を捨て、ひとり飄然と風まかせの旅の人生であつたかに見えるが、果たして、それは山頭火の本心からであつたろうか。思うに、彼も人の

子、本音を言えば妻や子と一緒に暮らしたかったのではないだろうか。家庭というものを知らずに育つた山頭火は、人一倍家庭のぬくもりを欲していた気配が見える。だが、ついにそれを手にすることができなかったから、泣きながら行乞流転の旅の人生を歩きつづけるよりほかなかったのである。

もう一つ、捨てるに捨てられない荷物が山頭火にあつた。それは、山頭火の身体の中を流れていた。山頭火を生み、山頭火という人間を生かしていた種田家の血である。この捨てようにも捨てようのない荷物を背負つて、山頭火はどうしようもない人生を生きたのである。

人間のいのちの底には自分の意志ではどうしようもない何かがあるものだ。人はそれをなんと言ふのだろうか。

山頭火は、『草木塔』第六句集の「孤寒」のあとがきにこんなことを書いている。

私の祖母はずいぶん長生したが、長生したためにかへつて没落転々の憂き目を見た。祖母はいつも「業やれ業やれ」と呟いてゐた。私もこのごろになつて、句作するとき

(恥かしいことには酒を飲むときも同様に)

「業だな業だな」と考へるやうになつた。

祖母の業、やは悲しいあきらめてあつたが、私の業、だ、なは寂しい自覚である。

だれかの台詞ではないが、人はみな、それぞれの人生のありやうのなかで、それなりに背中の荷物の重さをひきうけながら生きている。悲しいあきらめや、寂しい自覚というのではないとしても、それなりに捨てきれない荷物を背負いながら今日を生きているのである。

私は、宗教とは何を信じるかということより、どう生き、どう死ぬかだと思つてゐる。それは、別な言い方をすれば、このどうにもならない自分をどう見つめ、どう捨てるかということでもある。人間、長生きしたところで知れてゐる。

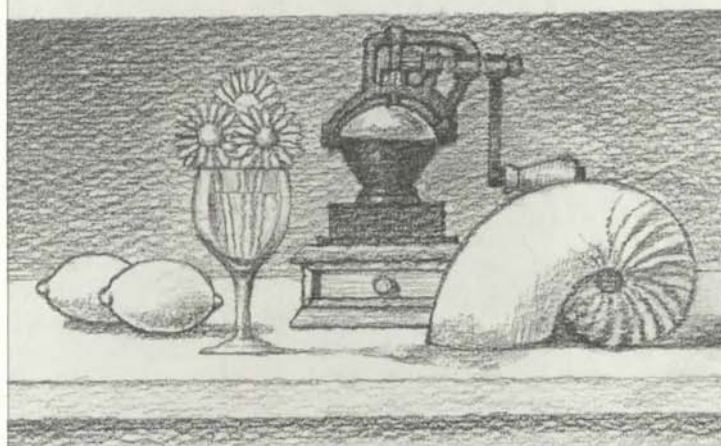
明日に夢をふくらませてゐる人も、今日につまりてゐる人も、いつか死ぬ時を迎えるのだ。

人間はだから、死ぬために生きると言つてもいい。いや、死ぬるからこそ生きられるのである。さすれば、たとえばプラスチックや核廃棄物のように、死ぬに死ねないものは生きる価値がないと考えることは正しい、と私は思う。

いずれにせよ、かくいう私もいつの日か自分にけりをつけなければならぬ時が来る。その時、慌てふためくことのないよう、庭前の樹木が落葉して冬構えをするように持てる荷物を軽くする手だてとして、かの清貧を考えてみようということになつたのだが、さて、どうなることやら。どうなるにせよ、私には今しばらく、肩に重たく荷を負つていくよりほかないようだ。

(南無の会編集主任)

旅の話



冬島莒太郎

イラストレーション—小菅遼

テレビでは旅の番組を好んで観る。FMを含め、旅番組は週間四十本もあると聞くが、全国とまではいわずとも主なものなら大体は観ているはずである。旅番組の効用は、居ながらにしてその地を旅している気にさせてくれることや、いつか行きたくさせてくれることに加え、曾遊の土地のものなら再確認の意味もあって学習効果は満点に近いといえよう。しかし、家族の反発は相当なもので、たとえば月曜から金曜まで正午から一時に流れていたテレビ東京の「ふれあい出逢い旅」を私が観ると、NHKの昼のニュースが犠牲になるし、夜は夜で老母の時代劇などたちどころにふっ飛んでしまう。近頃は子供らもすっかり承知していて、今夜はどのチャネルで何があると教えてもくくれるが、半面、自分の好きな番組が飛ぶ悲しさを無言のうちに

訴えてもいるようで心苦しい。近頃では九州や北海道はもちろん、外国旅行まですべてテレビですませるほどの習慣がすっかり身につけてしまっているのかもしれない。ただ、旅番組ばかり観ていると、気になる不満もずいぶんある。まず、旅にご馳走はつきものだが、例外なく「おいしい」を連発したり、味覚の表現も単調なのはどうしたことなのだろう。レポーターが若い人の場合は我慢もするが、人生経験の豊かな年輩の人が平板な表現をすると、この人の舌はいったいどうなっているのかと首を傾げる折もしばしばある。実際、甘い、辛いといった味を他人に伝えるのが難しいことは、私も十分に承知している。かつて婦人雑誌の「かくれた味」という一頁ものを十年余り担当したが、その味がどんなふうかを読者へ伝えるのに大層苦勞した

ものだった。「甘さを殺した甘さ」だの「出ず入らずの甘み」などという苦しまぎれの言葉を発明したのもその頃だった。でも、かりにも番組のレポーターを引き受けたからには、やはりそれなりの努力をしてくれなくてはいけない。露天風呂の入浴シーンで、女性が胸から足元までタオルでぐるぐる巻きに映るのも見苦しい。そんなに隠すなら入るな、と怒鳴りたくもなるし、事実、声に出して怒って家内にたしなめられたことも何度かある。大体、銭湯もそうだが、浴槽に手拭いを入れる習慣などこの国にはなかったはずなのに、あんな大きな湯上がりタオルを巻きつけて入ったりしたら、町内の老人達に怒られること必定である。箸の持ち方がまるで出来ていないタレントも興冷めだ。左手の遊んでいる食べ方も、美人であればあるほど育ち方

が垣間見えて見苦しい。こちらが老境に近づいているせいか、大体が若いタレントの場合、画面を観て怒る度合いが大きいのもやむをえないことなのであろうか。テレビは元来残酷なものだが、極端に痩せてきた人々を写したりすると、その感はずますます深くなるものである。大分昔の話だが、歌手の岡晴夫がそうだったし、美空ひばりも晩年はひたいに筋が立っているのがよく見えた。また、俳優の鶴田浩二も痩せかたがきわ立っていた。男性は顔のしわより首筋に老いがよく現れるのは自分でも目下のところ経験中だが、九十歳を過ぎて逝った田谷力三は別格としても、我らが青春時代の象徴的存在だった灰田勝彦も、晩期には首回りに老いを感じさせるものがあつて悲しかった。政治家のテレビ登場場瀬度はかなり多いが、安倍晋太郎さんの痩せ

方はひどかったし、近頃の渡辺美智雄さんもかなり気になる病後である。政治家に病気の情報は禁物だそうだが、あんなにやつれた姿が画面に映ってはどのようなふうなろうと同情する。

ただ単に老いを深めたというのなら、これも人間の定めだからと納得はするものの、しかし職業として最大公約数的な美の規準を通過してその容姿を売り物にしてきた人々の老いの姿を目の辺りするものもテレビであり、これもなぜか悲しい。往年の二枚目スターが老け役で出演したりすると、自分もトシをとったような気分になるからなのであろうか。気になるといえば役者の左ギッチョも案外目ざわりなものである。右を利き腕とするのが常識で左手は異端などという気は毛頭ないが、あれは親の教育の結果である。生まれつき左利きではなく、幼時の習癖

をそのまま放置したあげくなのだから、親たる者の責任であらう。考えてみれば左手を利き腕にすることに公民権を、といった運動もあるようだが、ああした風潮は野球の王選手が出現してからだろうし、その王選手も箸使いは右手だと伝え聞く。ま、本人がそれでよしとするならとやかく言う筋合いの話ではないが、日本の作法は右利きを原則として作られているものが多い、茶の道もそうなら膳の上の並べ方もそうだし、僧侶の世界なら木魚を左に置けば、それだけでもう邪道として退けられよう。まして食事のテレビ場面で左利きのお姫様が登場すればそれこそ噴飯ものだし、山城新伍が「どん兵衛」のCMで左箸でキッネうどんをすすっているのでは買う気も起きない。

ところで旅で思い出したが、一番遠い旅はな

んといっても天国への旅立ちであろう。つい先頃、NHKで臨死体験という特集を放送したが、洋の東西を問わず、一度息をひきとった人が死の淵から生還して、まず見たものはきれいな花畑と、暗闇をつき抜けた果てに巨大な光があったというのには、さすがに考えさせられた。番組では、巨大な光をキリスト教なら天国、仏教なら浄土といった表現をしていたが、もし本当にお浄土なら、その光はまさしく阿弥陀如来そのものである。事実、教典にはそのとおり記されているし、彼らはゆくりなく阿弥陀如来を拝んできたことになるのだから、貴重な旅の体験者と呼んでいいのであろう。いづぞや娘が貸ビデオ屋から丹波哲郎氏の「大霊界」というのを借りてきたことがあったが、意外なことに若者の間では死後の世界を映像化したものとしてか

なりな評判をとったらしい。ストーリーはきわめて簡単に、人間は死んだ瞬間に靈魂が肉体から離脱し、上昇して靈界に至るといったものだったが、丹波氏にどれほど仏教の素養があるかわからないものの、我々がいうところの大霊界（極樂）は眩しい光の世界で、花が咲き鳥が歌うといったパラダイスとして描かれていた。申すまでもなく浄土宗は西方十万億土の彼方にあるお浄土を信じ、往生することを願い、そのためにお念仏を称えるのを本旨とする教団だし、本尊阿弥陀如来は大光明を放って衆生済度の誓願をお樹てになっているのだから、彼の国が明るい光に満ち満ちたところとして描かれているのに異存はあるまい。また、人間界がそうした往生のための修業の場である、といっているのも結構であろう。ただし、学者達は慎重ですぐ肯定

の判断はくださず、それは生前の願望やら経験が脳のどこかに記憶されていて、それが臨死の折に蘇ったにすぎないといった話をしていたのが印象的である。しかし、実はこの私にも臨死の体験があつて、もしそれを話したら学者がどう答えるかは疑問である。古い話で恐縮だが、昭和六年の二月に私の祖母が死んで、その年の夏、私は疫痢にかかつて生死の境をさまよつた。流行性のものだから近所の幼児が幾人も同じ病におかされ、そして毎日のように死んでいった。以下は三、四歳の私に記憶のあらうはずはないので、すべて老母からの伝え聞きである。ある晩、私もすっかり衰弱のきわみに達し、駆けつけた医者も、瞳孔が開いてしまったので今夜が山場だし、明日まで命があつたら奇蹟に近しいといつて歸つてしまった。一方、母の伯父な

どは巻尺で身長を測り、三尺の寝棺で間に合うかどうかといったことまで相談したという。まさに臨死のきわみといつてもいい。と、その時、私が突然、「さあさ、長靴はいてきれいなお花がいっぱい咲いているおばあちゃんのところに行きましょう」と、うわ言を呟いた。周囲の者は皆顔を見合わせ、これは亡くなった祖母が孫を呼びに来たのだと囁いたのも無理はあるまい。枕元には、買ったばかりの長靴も置いてあつた。さてそこで、もし生前の体験や願望がその原因だというのなら、わずか三、四歳の幼児に果たしてそんなものがあるかどうか、これはぜひ一度、学者先生達に聞いてみたいと思うのである。でも正直な話、いくら旅が好きでも、死出の旅ばかりはまだ当分の間ご免なのだが。

(作家)



新春を往く

文と写真——夏 攸吾

贅沢な年越し

大阪にいる従弟夫婦を暮れから迎え、今年の我が家はちよい次代予感的な正月だった。うちは私わたしら夫婦と母、従弟夫婦にも子がないので、大人ばかりの新年。

たがいの顔み合わせればふと苦笑まじり、なにやら熟年ホームの趣きでは

あるが、それぞれがまだおかげさまで
壮健だから、大掃除も、おせちなど正月準備も手早くかたづき、いたって呑気なものである。

生活のレベル形態が変わって、世のなか暮れの大忙しという雰囲気は、年薄れていく。我が家もそのうち、だ
が……。

旦だんつく二人とも包丁を握り、それに

津軽海峡線吉岡海底駅（上
下とも）



歴戦の主婦三人が加わるから、台所の騒ぎだけは格別。せめて小料理屋くらいの、調理場が欲しいと想わせた。

素材の主役は、イトウ。釣りをする方ならご存じの「幻の魚」。まず、そのあたりの話からはじめよう。

じつは、師走に入ってまた函館に行く用があり、このたびはじめて青函トンネルの北海道側、吉岡海底駅に寄った。津軽海峡線には青森県側にもうひとつ竜飛^{たづひ}海底駅があり、ともに見学のみの特殊駅。途中下車予約制の「ゾーン539」は、トンネルの全長五十三・八五キロからきた愛称だ。

海峡線の開業からはや五年、これまで見過ごしてきたのは、どうも暗あい

穴ぐらは好きになれない性分と、代わり廃止となった愛すべき青函連絡船



雪国、五能線鯨ヶ沢駅の待合室



への義理立てによる。

しかしいっぽうで、このトンネルにも忘れがたい思い出……。私は二十年ほど前、吉岡側から入坑、難航きわめた工事現場を見学させてもらったことがある。斜坑を降りて行くうちに「海面」とマークされた地点を過ぎ、湧水がひたひた足を洗って流れ、やがて眼前に地底の巨大な岩が現出したのだ。猛然と轟音ひびかせ岩盤に挑む、掘削機械類も凄かったが、それより吃驚したのは（鉄道トンネルは一筋）という觀念をうちやぶる縦横の坑道、信号が明滅する交差点に度肝をぬかれた記憶が、いまでも鮮明に残っている。

現在ある吉岡海底駅が、ちょうどそ

のあたりか……。詳しい話はまた別の機会にゆずるが、世界一の海底トンネルの威容、その一端を垣間見るのもゾクリ妙味ではある。

さて、函館ではこの季節に欠かせない魚、でっぷりとまさしく鰭腹のマダラを一本、宅配にたのみ、予定どおりの正月用。が、メインプランはあくまでもイトウだ。

帰路、青森から日本海側へと迂回、五能線に乗って鯨ヶ沢へ。津軽の麗峰岩木山をめぐるローカル線、山麓は一面のリンゴ畑、そして日本海……大好きな路線のひとつだが、鉛色の雲が低く垂れこめて寒いばかりの、こんな季節はずれにやってくる物好きな旅人は、

活〆で宅配されたイトウ、
五年魚、五五センチ、二キロ



めったにいない。

鱒ヶ沢は、西津軽の港町。かつては



鱒ヶ沢町イトウ養殖場に立つKさん

津軽藩の交易港として、また漁港としても栄えたが、現在は漁獲も減少、さびれるばかりと聞く。

そんな小さな港町で「幻の魚」イトウの養殖に成功したという、ニュースを二月の新聞で知ったときから、訪れるチャンスがうかがっていた。

「商売柄、私の財産は『ねた帖』。もの書きにとって大切な取材ノートの、元ネタ集めのメモ帳である。いつも持ち歩いて欲張る、ことにしている。」

町の水産商工観光課に、Kさんを訪ねた。電話で話した印象そのままの、好青年である。東海大学水産学部を卒た彼は、七年前ちょうど役場に入ったときからスタートしたイトウ養殖の担

木更津産の名品落花生の
収穫



当者になり、一度は稚魚全滅の苦汁を
味わいながらも、「四年ほど前からよ
うやく軌道に」のせた。

雪のちらつくなか案内された養殖場
は、世界的遺産に登録された白神山しらかみ地

から流れる赤石川の畔。十五ある直径
六メートルの池には、支流左内沢から
ひかれた清冽な水。成長年数ごとに分
けられたイトウのなかには、ゆうに一
メートルを超える九年魚もあり、ユラ
リと水に潜る魚体に思わず固唾をのむ。
イトウはサケ科だから当然、うまか
ろう魚、地元では「川とろ」と呼ぶ。

わが国では現在、北海道のごく一部
にしか棲息しないとされる淡水魚の王
者。アイヌたちから神と崇められたと
いうその風貌は精悍だが、「繁殖力が
弱くて、オスの精子が少ないうえに稚
魚から一年くらいは成長が遅い」のだ
そうだ。Kさんの長男は六月生まれで、
それも「イトウの産卵期にあたる四



五月を避けて……」と笑う、ちよいと
いい話。

ともあれいま鰯ヶ沢では、このイト
ウをなんとか「岩木山や舞の海みたい
な町の誇りにすべ」と懸命。これまで
町内の旅館や飲食店に限り出荷してい
たのを、これからは産直にも乗り出そ
うと意気込む。とりあえず平成五年度
は、体長五十センチ、二キロものの四
五年魚を千五百匹が目標。

いうまでもなくKさんに宅配を頼
み、別れ際に放流の可能性を尋ねた
ら、「無理だと思います、いまの川に
はそれだけの自然な包容力がないです
から」とのこと、ちよいと哀しい話も
あった……。

人波にもまれる新羽田空港、ビッグバード



近場に遊ぶ人たち

そんなわけで、暮れの台所が一層騒がしくなった我が家。なにしろイトウに鰯、それに親戚から新巻鮭まで送られ、一度に三本もの大物をさばくことになったからである。

さすがに人手も出刃もへたばったが、そのぶん、「こんな贅沢して、バチが当たるぜ」というくらいに年越し、正月の膳になった。

刺身とルイベにしたイトウは、鱈に似たオレンジ色の身美しく、こってり脂がのって舌にとろけるのを、伊豆の生山葵わさびでキリッとしきしめ……。また、ちり鍋の鰯には京都水尾名産の柚子みずのう、

これだつてつい先ごろ現地で調達してきたもの、混じり気なく清々しいぼん酢の香気を添え……。さらに箸やすめには木更津は山津屋の落花生、豆を選んで軽煎り本場物、殻付き千葉半立の、豊かな薫りと味わい愛でつつ杯をかさね……。てな具合である。

「食べたら体も動かそう」というわけで、元日は人並みに、菩提寺である目黒の五百羅漢寺と目黒不動に初詣。

二日は女衆の希望で、「はじめてなのよネ」の「はとバス」ツアーだ。私や（そんな、おのぼりさんみたいなのと……）気がすすまなかったのだが、「たまには人の運転で楽しんでみようよ」と、いわれてみればそのとおり、けっ

東京タワーから新春の夕焼け富士



こう楽しめてしまった。しかも、これがまた予想に反して、私たちが乗った「おもしろ東京体験」なる新コースには、東京・上野・新宿から計八台のバスが繰り出す人気。

遊覧船で東京港をめぐり、新名所のレインボーブリッジ通って船の科学館、物見高い人であふれる新羽田空港「ビッグバード」でもみくちやにされ、しめくくり夕景から夜景の東京タワーも凄い人出で、展望台へのエレベーターには長蛇の列……という、考えてみりやアホらしいような、それでもタワーのライトアップ見上げて「きれいねえ」なのだった。

三日は休養、箱根駅伝テレビ観戦でごろんとすごし、四日にはまた親族つ

どつてのバスツアーだ。こちらもやはり盛況の、メニューは久里浜からフェリーで房総に渡り、館山の早い春の花摘みと漁師料理とイチゴ狩り。

たあいもないお遊びながら、成長した子らの参加しないのがむしろよかったのか、いい歳した大人ばかりでおおいに盛り上がったしだい。よその組も、似たようなもの。

マスコミは、あいかわらず海外脱出組にばかり目をむけていたようだけれど、こんなふうに、不況に遠出はひかえましょ現象だって、現実だったのである。

なにはともあれ七草粥、すすってほつとため息ひとつ……の私だ。これだけは毎年変わりがない。

テレビキャスターのアングル

⑥

テレビが作った二世相

利根川 裕

オリンピックには、聖火がつきものである。古代オリンピックの発祥地だったギリシアで、太陽光から点火した火を、多くのランナーがつぎつぎと渡しつづけてオリンピック開催地まで運ぶ。

たしかこれは、一九四〇年のベルリン・オリンピック開催のときの、ヒットラーのアイディアだったと思う。ヒットラー

の政治的大演出だったわけである。

今年二月に、リレハンメルで冬季オリンピックが開かれる。これにも聖火リレーがあるが、情報によると、このオリンピックの公式スポンサーであるコカ・コーラが、オスロ市近郊のリレー区間を買いつけて、そこで日本人テレビタレントたちが三人、一人五百メートルずつ走る

ことになった。そして、この模様をテレビ朝日がドキュメンタリー番組に仕立てて放映すること。もちろんテレビ朝日は、そのため多額のテレビ放映権料を支払うことになる。

世界的規模で行なわれるスポーツ大会であるオリンピックは、もう素朴なスポーツ大会ではなくなっている。政治的大ショーであり、商業主義とテレビが手を結んでのイベント・ショーである。

現代のオリンピックは、テレビ放映権という莫大なカネをあてにしないで開催不可能になっている。

テレビの威力や恐るべし、というところである。そしてテレビは、何もかもショーアップした見世物に化してしまう。

数年前の湾岸戦争は、現代世界の国際政治の大きなひずみから発生した不幸な出来事だったが、これが国際的にテレビで報道されてゆくにつれ、戦争はしばしばスリリングな大ショーとなる一面を生んだ。

テレビは、すべてをショー化させる傾向をもっている。なにせ映像のある情報媒体である。画のある情報媒体である。

テレビ報道は、画でみせることを基本にもっている情報媒体である。

目で見えてわかること。思考力や論理力よりも前に、まずもって視聴覚に訴えること。これがテレビの最大の武器である。だから、テレビ情報時代というのは、ありとあらゆるものをショーアップ化する

る時代ということになる。

これでいいのか。これが現代の文化的大テーマである。このテーマは、本質論からいっても、現実論からいっても、議論百出するにきまっていて、とても早急に結論や定説が出るものではない。たぶんこのテーマをめぐる議論が、これから十年か二十年の文明論のメインになるであらう。

それはともあれ、こんなにまであらゆる分野にテレビがくいこんできている現代である。

大上段の大テーマの議論はともかく、こういうテレビ情報が、日夜、わたしたちの、ごく身近にあるブラウン管から吐き出されていて、わたしたちは、好むと

好まざるに関わらず、そういうテレビ情報とつき合っている、善きにつけ悪しきにつけ、これが現代生活である。

さてそこで。

多かれ少なかれ、現代人の生活感覚は、テレビ時代とともに変化してきた、わたしは観察している。

わたし自身は、自分を活字文化で育ててきた人間であり、ある時期の勤め先も出版社を選んだし、小説であれ評論であれ、文字を書くというかたちで自分を表現することを、自分の正業と心得ている人間である。

そんなわたしが、たまたまの機縁からテレビキヤスターなるものを十年あまりもやることになり、そこでテレビ的表現

というものの本質に触れることになった。そしてわたしはつねに、意識的にも無意識的にも、活字表現の世界と映像表現の世界を比べてみていた。

大げさな議論は遠慮するとして、わたしはテレビがわたしたちの日常生活に密着するようになってから、従来の活字文化が主流であった時代とは、はっきりと違った生活感覚が生まれ、しかもそれが現代生活の主流になっていると見立ててみている。

その現代世相の見立てを、少し刺激的な項目にまとめてみると、つぎの三つになる。

一つ、早いが勝ち。
とにかく現代は、情報がしのぎを削つ

ている時代である。ここで情報というのは、何も国際政治や国内政治に関することに限らず、犯罪等の社会事件、ないしは某タレントのスキヤンダルや、それにとまなう噂話や、かげ口まで含める。そういうものが、日夜テレビ情報として伝播している。

そして、情報というのは、何はともあれ、早くないと意味をなさないのである。ニュースは、文字どおりニューでなければいけない。手つとり早くいえば、新聞の今朝の朝刊が届いたからには、昨日の新聞はもはや、なんの意味もない紙クズと化すのである。これが情報というものである。

まだ誰も知らない耳よりなことを、い

ち早くキヤッチするところに、情報の情報としての値打ちがある。

いち早く知る。これが値打ちなのである。そして当然、テレビをはじめ情報媒体は、いかにいち早く伝えるかが勝負なのである。

たとえばの話。若ノ花の恋人ないし婚約予定者が誰であるかは、決して天下国家の大事ではない。しかも、それを早く知ろうと知るまいと、社会が変動するわけではない。

しかし、いち早くそれを知ろうとするのが現代人の生活感覚である。これが、情報社会の原則であり、現象であり、流行である。

二つ、目立つが勝ち。

目立ちたがり屋が、はんなしている。わたしは、自分の育った年齢的たしなみからして、目立ちたがりということには、かなり抵抗感をもつ旧タイプである。が、新タイプの人間は、目立とうとする。目立つことはいいいことだ、とほとんど信じこんでいる。

さきにも触れたが、テレビは映像のある情報媒体である。目で見てわかることを基本とする情報媒体である。そして、そのテレビが情報媒体の手段となるにつれ、いかに目で見てわかるか、いかに目立つかがポイントになってくるという現象は避けるべくもない。

存在しているということは目立つこと、というルールが、社会現象として成立し

てしまった。これが現代なのである。

値打ちがあるから目立つとは限らない。むしろ、目立つたものが値打ちがある、と思いいこむところが現代なのではないか。

三つ、おもしろおかしいが勝ち。

一番組のテレビ視聴者は数十万どころか数百万である。あるいは数千万にも達する。この膨大な人たちは、むろん男女別、学歴別、職業別、人生観別、趣味別等々、千差万別である。

テレビは、こういうつかまえていく数百万、数千万の人をつかまえるようにする。

そのときのテレビの手法は、当番組をいかにおもしろおかしくするかにある。それが大衆社会の最大公約数になる。

テレビという、マスコミ中のマスコミ的情報媒体は、むろん、現代の大衆社会としつかりと手を結ばなくては成立しえない。

マスコミと大衆社会をつなぐキーワードは、「おもしろおかしい」ということになるのではないか。

以上が、じつさいにテレビ番組に関わってきたわたしのテレビ的社会現象論である。

こういう社会現象が、文化ないし文化現象といつていいものかどうか。

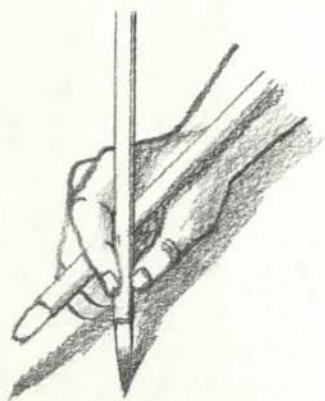
わたし自身は、テレビのもたらす社会現象が文化現象といつてもいいレベルになることを夢みている。

(テレビ朝日系キャスター・作家)

生きる

千葉勇作

イラストレーション 小菅 遼



「愛する人を失ったとき、そのつぎにがんになる可能性のあるのは誰か？ それは、あなたである……。」アメリカの腫瘍学放射線科のカール・サイモン博士の本の書き出しですが、こんどは私がそのとおりになってしまいました。よくよく夫婦でがんに魅入られたものです。左の耳の中が少し痛かゆいので、近所の耳鼻科医に

診てもらおうと、

「耳に血マメが出ていますね」

といわれました。私はケロイド体質なので、とつさに、

「耳のがんではありませんか？」

と尋ねました。すると、先生は笑いながら、
「耳のがんは、まず、めったにありませんね」

というのです。三か月間薬を塗ってもらいましたが、結局治りませんでした。それでこんどは、街の中心部の医院で診てもらいました。老練と聞いた先生はかなり老齢で、綿棒の手元が震えて心もとないのです。

「耳のがんではないでしょうか？」

と通院のたびごとに聞いてみたら、

「あなたは少しがん・ノイローゼですね」

と、私のとりこし苦勞のように取り合ってはくれませんでした。六か月たっても治らないので、家からは遠かったのですが、耳鼻科医で高校先輩の武山貢次先生を訪ねました。妻が食道がんで死んだのを知っている先生は、その日のうちに東北大学病院の病理学研究所へ送る標本検体を摘りました。

一週間の培養が過ぎました。大学からの報告書をみながら先生は、

「千葉さん。タチが悪かったよ」

と私をできるだけ驚かせないように、ひとことあっさり告げたのですが、私の心臓は一瞬ドキリとしました。これが私のいわゆるがん告知です。私は緊張を抑えながら、先生のそばにあった報告書を逆さによく見ました。

「キャンサー。イクストリーム・スケアマス。

明らかにキャンサーです」

と英語で書いてありました。瞬間目の前が真っ暗になって、

「がんですね」

と私が念を押すと、先生は私の目をじっと見て、「そうです」

とはっきり答えました。あらかじめ、がんならがんとはっきり知らせてもらおうよう頼んであったからです。

「このうえは、一日も早く入院して、摘出手術

と放射線治療を受けるように」。病名のスペルを暗記して、帰途丸善で『医事辞典』を引きました。耳のがんは三十万人に一人ぐらいで、五年生存率は二十%以下でした。このときほど、万事休す、しまった、と思ったことはありません。早期発見を逸したことが悔われました。最初の二つの医院で貴重な六か月を無為に過ごしたことが残念でなりませんでした。

宙を歩く思いで家にたどり着くと、その夜はシヨックで一睡もできず、悪寒が全身を走り、ひとりで涙がとめどなく流れて、一日で二キロも痩せました。私は妻が死んでからの四年間、高校生の次男と「父子家庭」でしたので、翌日彼の組担任に会って学校のことをお願いし、午後は半日がかりであわただしく自分の身の整理をしました。手遅れで、とても助からないと覚悟した私は、あとはただ、無性に自分が生ま

れ育った石巻のことばかりが思い出されて、もう一度あの北上川を見て死にたいと、そのことばかりだったのです。

その夜、急に石巻の菩提寺西光寺を訪ねました。住職の樋口隆信さんが心配顔で待っていました。死後の簡略な葬式のことや、友人知人への感謝の伝言も頼み、急いで用意していった形見の品も渡して、心尽しの石巻のとびきり上等のお寿司をご馳走になりました。耳の手術によって、私は三分の二の味覚を失うことになるのです。彼の車でゆっくり川岸づたいに送られて、私は思い出の母なる北上川に別れを告げました。そして翌朝十時には、大学病院に入院していたのです。三月三日、まるで耳の日の記念行事のように、九時間に及ぶ長い精緻な手術を受けました。あとで私の存命年数を数えやすいように、この日が手術日に選ばれたと思います。手術の前には、

体力ギリギリの六千六百ラドのコバルト療法を受けました。激しい抗がん剤の副作用にも悩まされます。二年半の間、妻をやさしく看病してやったつもりでしたが、がんというおぞましい病気は自分がなつてみなければわかりません。がんで死んでいった妻の苦しい気持ちもよくわかりました。

そして七か月目、やっと無事に退院することができました。闘病生活をする新しい家は、青葉山のすぐ下の、風光明媚な広瀬川の川べりだったのです。あたりは新緑と生気に満ちあふれ、森羅万象、天地一切のものに感謝の気持ちでいっぱいでした。このときほど、人間として生命の尊厳を強く感じたことはありません。これまでは違って、私は一日一日を大切に、精いっぱい明るく生きることを深く心に誓います。

夫婦のがんによって、もう一息という大事な

ところで仕事に挫折した私の人生は、以前には想像もしなかった別の方向へ流れていきます。

入院したとき私は最初個室に入ったのですが、夜になると、どうしても死ぬことばかり考えるのです。『死の受容』とか、キュブラー・ロスの『死ぬ瞬間』などばかり読んでいました。それで、同じがん患者だけの六人部屋へ移してもらったのです。同病相哀れむで、いくらか気分が楽になりました。精神状態の不安を聞いたのでしよう、ある日、住職の樋口さんが親切に般若心経の写経や写仏のお手本、筆、紙、硯、墨を持って見舞いに来ました。写経を有難いお寺に納めてくださるというのです。病室で一字一字心を込めて書いていると、不信心者の私でも、次第に心が落ち着くのです。そのうちに、写経だけではもったいないと思って、私は丸善から水墨画の手本を取り寄せ、高校を卒業して以来



四十年ぶりに絵を描きました。なぜか不思議に絵を描いていると心が和むのです。がんのことが忘れられるのです。

あるとき主治医がそれを見て、精神医療に役立つから退院してからもそれ続けなさいとアドバイスしました。退院後少し落ち着いてから、私はその助言に従って、仙台駅にある河北カルチャーの水墨画の教室に通います。しばらくして小品展に出席できるようになったころ、ここでは高倉勝子先生が、私に日本画の素質があるというのです。しかし、そう奨められても、いつ再発するかも知れないがん患者で、六十歳の私には到底無理で、それに油絵の数倍も根気が必要な日本画は、技法も難しく容易でないことぐらいは十分知っていました。いままさら下手な変な絵を残して死ぬのも悔やまれるし、早く上達するには並大抵の努力ではとても駄目だと思い

ました。なんとやめようと思ったか知れませんが、そこへ住職から「病いがまた一つの世界をひらいてくれた、桃咲く」という坂村真民氏の詩を書いた色紙が届きました。私は意を決して、仙台の日本画の先生三人と水墨画の先生二人に同時に習いはじめました。

しかし、私にとって初めての大作「午睡のあ」との展覧会場で、このことが露見して、その中の一人の先生から破門をいわたされる憂き目に逢うのです。学問や芸術の世界は自由で風通しが良いに限ると思うのですが、仙台の日本画界はたいへん旧弊なところでした。そうなる、私の勝手な気質はますます激しく燃えるのです。絵の仲間が油絵に転向しろと奨めるのも聞かず、私は私を破門した先生が審査を務める仙台などの公募展に大作で出品してやろうと心に決めます。もはや、がんのことなど念頭にあ

りませんでした。

私は基礎デッサンの勉強のために東北美術学院という予備校に通い始めました。石膏デッサンが主な学習です。ところがここは、芸大、美大の受験のための教室ですから、デッサンの勉強だけという中途半端な気持ちで来られては他の受験生に迷惑だということです。行き掛かり上、かつて四十年前に父の胃がん死によって大学受験を断念させられた私は、それならばと、六十歳にして武蔵野美大の日本画科に挑戦することになりました。もちろん競争倍率は二十一倍でしたから、絶対合格するわけではないのですが、一生のうちで一度大学受験の緊迫感を経験してみたいのです。

予備校には朝七時まで行かないと、実技のデッサンの良い場所がとれないのです。私はこの教室で、鉛筆の削り方、紙の貼り方から始まっ

て、構図、明暗、バランス、エスキスやクロッキーを芸大を卒業したばかりの若い先生たちから徹底的に特訓を受けました。年寄りだからという遠慮会釈のない強烈なしごきです。おとなしい女子生徒は泣き出す始末でした。夕方六時から九時までは、国語と英語の受験問題集に取り組みました。あたりは全部四十歳若い高校生たちで、私は他の生徒たちから「おじいさん」と呼ばれました。

試験の日、前日に下見したとおり、国分寺から鷹の台で降りて、正門近くの公園のベンチで年配の受験生が来たら話をしてみようと一時間半も早く行ったのですが、他の受験生は全部二十歳前後で、私のようなおじいさんは一人も来ませんでした。試験官と間違えられないように、背広でなくジャンパーを着て行ったのですが、それでも「付添いの人は外で待っていてください

い」と注意されました。私が受験生だというと、顔写真となんども見比べられました。実技と英語は相当の確信が持てましたが、国語の女流児童文学史からの出題はどうにもなりませんでした。しかしあの張りつめた緊迫感はやはり一度経験してよかったと思っています。もしも宝くじが当たったなら、家も海外旅行もいりません。私は再び予備校に通って、こんどは京都芸大の日本画科を受験してみたいと思います。もちろん合格すれば、日本画の伝統芸術の真髄を基礎からみっちり究めたいと思っています。

退院後三年目、体調に多少の自信が持てるようになったところ、私は友人の骨折りで、ビルの管理会社へ勤めることにしました。主な仕事はマンシヨンの管理と清掃です。管理人の仕事はゴミ出しが大変なくらいで、あとはいたって楽なのですが、一つの箱のような事務室に納まっ

て、孤独のまま老成を待つようなので、私は清掃のほうを選びました。病気の前の仕事とは、天と地の相違ですが、身辺の整理をしてしまった私にとって、この方法以外にはみあたりませんでした。六十一歳の掃除夫の誕生です。

掃除は主にマンシヨンの共益部分である玄関周辺のガラス拭きと、床の清掃です。各階の非常に長い廊下の掃除もあります。重いポリッシャーで強い洗剤を使って床を洗い、汚れた水をバキュームで吸い取り、モップで拭き、大きな扇風器で乾かし、ワックスを塗って磨きます。幅木や汚れのひどい隅々は、這いつくばって直接手で掃除をしなければなりません。たいへんな肉体労働です。最初の一週間は、私も老人の部類ですから、身体がばらばらになるのではないかと思いました。しかし、毎日諸所方々のマンシヨンを訪れますと、その管理人が元学校

の先生だったり、自衛隊幹部、郵便局長などさまざまで、私よりもっとつらい人生の苦労話を聞かれます。また一方、そこに住む人びとのいろいろな人間模様もいやというほど見せられます。この仕事でまた、これまでとは違う社会の縮図をかい間見る思いでした。

私は帰宅すると、自分で夕食の用意をし、風呂からあがると、くたくたになって、テレビも見ないで寝てしまいました。絵はいつも朝早く起きて描いています。それでも私は欲張りですから、会社終了後、人物デッサンと生け花の夜学に通い、日曜日には日本画の教室に通っているのです。しかも旅行会社に勤めている長男が出張すれば、母親のいない二人の孫のところへ泊って、食事の世話をしなければなりません。そして、いまだに月一回大病院に通院しているのです。私は一日一日を精いっぱい大切に生

きています。名僧知識の高邁な法話よりも、人生に傷つきながらも、誠実に一生懸命生き抜いている人たちの話に強く心を打たれる昨今です。

親友の石島恒夫君から、彼の死の年の正月、「ことしも立派に生き抜いてください。生命の尊さを身をもって示してください。ご自愛のほど」という年賀状をもらいました。これは私に対する遺言状のようで、いつも頭から離れないのです。それで私は思い切って、積極的にかん体験を話すことにしました。がん患者とがん患者の家族という立ち場から、がんで悩む人たちへ少しでも勇気づけのお役に立てればと、ターミナル・ケアなどいろいろの会に出席したり、仕事の合い間を縫って、ホスピス建設運動にも参加するようになりました。近頃話題のがん告知についても、人間の一生は真実の中に終わるべきだという観点から、高齢と末期患者を除い

ては、告知すべきだと主張しています。妻の場合も自ら望んで病状を熟知し納得して、感謝の中に死を受容しました。いまや、医療と宗教は不可分の段階にきています。

NHKテレビ新日本探訪「いのちの絵」副題がんに挑む、に出演しました。私にとって絵を描くということは、私たち夫婦の人生をめちやめちやにしたおどましいがんに対する敵打ちです。私をよく知らない人は、私が日本画と生け花を習っていますという、優雅な老後で羨ましいとおっしゃいます。しかし実態は、趣味とか手慰みではないのです。私の不運な口惜しい人生に、一矢報いたくて、それが業^{わざ}となって、執念となって、死ぬまでにどこまで本物の絵が描けるようになるか、魂をぶち込んだいのちがけの絵が描けるか、といった人生最後の挑戦となったのです。

「芸術にヌクヌクはいけません。青年のようなハングリー精神でがんばってください。痛みがあつてこそ人生芸術。押し寄せる内なる敵と闘ってください」と勇ましい激励の手紙が届きます。絵の具代ぐらいは自分が稼がなければなりません。

この齢になりますと、私の周囲には、功成り名を遂げた人たちはいっぱいいます。が、いまの私は未知数です。これからが私の本当の青春と思っています。四十歳齢下の若者たちと情熱を競い合つて、春秋の夢を追います。私を持って生まれた感性の極限を、これ以上しぼり出せない絵の具のチューブのように完全燃焼して、グッドバイしたいのです。泥の中に咲く蓮華の花のように、床の汚れを拭いた同じ手で、輝くように美しい絵を描きあげたいのです。いま私は、生きているというありがたさを、身をもってひしひしと実感しています。

(画家)

午後の日差しの中で

〈第二回〉

めぐり会い(二)

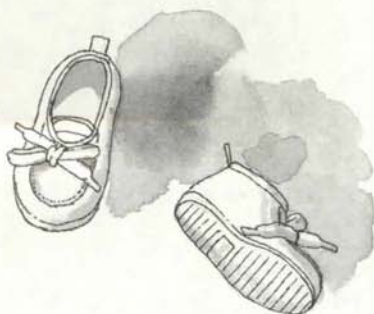
吉川英明

前回、人の縁というものの不思議さに触れたが、その縁の中でも一番ドラマティックなのは、やはり男と女の出会いだろう。

恐らくは何億分の一という確率で、特定の男

と女が出会い、愛し合う。

そこにはさまざまな出会いや別れがあつて、それだけでも十分に複雑で劇的なのだが、そのうち何割かの男と女は子供を作つて親となる。



つまり、まったくの他人だった男と女が、今度
はそれぞれと血の繋がった彼らの子供とめぐり
会うのだ。

生まれてきた子供にめぐり会うというのは、
変な言い方かもしれないが、親と子、兄と弟な
どという血縁も、所詮は、血の繋がりという特殊
な形態を伴っためぐり会いなのだと私は思う。

もともと、それは私が男だからで、女性の場合
は、十カ月もの間胎内で育み、激烈な苦痛に
耐えてこの世に送り出した我が子に対して、め
ぐり会ったなどという偶発的な感覚は、持ち得
ないのかもしれない。

その私にしても、生まれたばかりの赤児の顔
を見た時には、

ああ、俺の子だ

という深い感動を味わったし、その赤ん坊がよ

ちよち歩きを始めてから一人前の口を利くよう
になってからでも、

こんなところが俺に似てる

などと、自分の分身を見ているような気持ちに
変わりはなかった。

ところが、子供たちが二十歳を過ぎ、学校も
卒業して社会に出るようになってくると、もは
や分身などという感じは更々しない。

我が家は、私と、息子一人に娘一人の三人家
族なのだが、最近、生活のパターンがそれぞ
れ違うため、全員が顔を合わせて夕食を共にす
る機会も次第に減ってきた。

私は、麺類が好きで、大晦日には必ず生の
蕎麦を買って来て、氷のような水でさらした固
茹でを親子揃って啜るのだが、去年の大晦日は、
息子と息子の女友達と三人の年越し蕎麦となっ

た。

娘の方は、宵のうちから出掛けたまま杳^{よう}として行方が知れず、息子たちも蕎麦を食い終わると、初詣にと言って出て行った。

正月は、静かな三が日だったが、階下の部屋でぼんやりしていて、どこかかと二階で響く二人の足音を耳にすると、他人が家の中を歩き回っているような錯覚を覚えてしまう。

二階でする子供たちの足音は、ばたばたと、もつと小刻みなものだという印象が消えていないのである。

そんな時、あれは二人が大人になった足音なのだと改めて思い直すと、

あの二人と、親子という形でのもの、何かのめぐり合わせなんだなあ

と、考えてしまうのだ。

我が家は三人家族と書いたの、不審に思われる向きもあろうが、実は私、五年ほど前に離婚した。

原因は、大雑把に言う、いわゆる性格の不一致というやつだ。二十年の間に、それがじわじわと昂じて、いつの間にかお互いほとんど口も利かない仲になっていた。

一年あまりの別居生活を経て離婚したのだが、それ以来、二人の子供と三人暮らしというわけである。

私と妻とは、別れてしまえばまた元の他人に戻る。

だが、子供たちにとってみれば、これこそいい面の皮だろう。彼らが選んだわけではなく、こ

の世に生を受けて、たまためめぐり会った父親と母親の仲が悪くなり、一緒に住めなくなってしまうのだ。その点では、彼らにとって不幸なめぐり会いである。

もう二人とも大人だからまだいいが、私は、別れた妻よりも彼らに対して済まないと思っている。

麺

突然、トーンが変わって恐縮だが、さっき蕎麦のことを書いていたら、無性に麺の話がしたくなった。

私の麺好きは相当なもので、蕎麦はもちろん、うどん、ラーメン、焼きそば、スパゲッティ……とにかく、粉を紐状に延ばしたものを、一度も口にしない日は一日としてないほどだ。

自然、蕎麦の茹で加減や汁の甘さ辛さなどにも、私なりの一言言はあるのだが、以前四国の高松に行った折り、彼の地の人の、うどんへのこだわり、仰天敬服した経験がある。

高松へ着いてすぐ、昼食にうどんを食べて感心し、夜の会食の後連れて行ってもらった小料理屋で、さすがは讃岐と、昼間のうどんを褒めた時のことだ。

「どこで食べたの？」

ちやきちやきとした威勢のいいおかみが、身を乗り出してきた。

「空港からくる途中の〇〇屋。」

「あ、駄目……。」

「え？」

「あそこは駄目。店は奇麗だけどね……大きすぎるのよ。あんなにたくさんお客が入ったんじや、

おいしいうどん、出せるわけない。」

けんもほろろである。

「へえ、東京じゃ、あんなうまいうどん、滅多に食えないけどね。」

「讃岐のね、おいしいうどんていうのはね、あんなもんじゃありませんよ。」

「ふうん、じゃ、何ていう店がいいの？」

「□□か、△△ね。後で地図書いてあげるから、明日のお昼に行つてらっしゃい。□□だったら十一時五十分ごろ、△△へ行くんなら、もうちよつと早い方がいいかもしれない。」

「何それ……その時間だと茹で立てが食えるの？」

「茹で立てなんて当り前でしょう。打ち立ての茹で立てでなきゃあ、うどんじゃないわよ……」

その時間だとね、二番茹でが食べられるの。」

「二番茹で……。」

「知らないの？ うどんはね、二番茹でが一番おいしいのよ。」

「あ、同じお湯で二番目に茹でたうどんてこと？」

「そう、一番茹ではまだお湯が練れてないのね、うどんの塩気が出過ぎちゃうのかな……お風呂だって、言うでしよ、更湯は身体によくないつて。」

「なるほど……。」

「三番茹でぐらいなら、まあ、悪くはないんだけど、その後は段々塩が出てくるし、粉っぽくもなつてきちゃう。」

「うん、それはわかるな。」



「だから、うどんは二番茹で……あたしたちは、
どこの店は大体何時ごろ行けば二番茹でが食べ
られるってこと知ってて、その時間に合わせて
食べに行くの。」

「ふーん、凄いいんだね、うどんの世界も……だ
けど、高松の人が皆そんな凝った食べ方してる
わけじゃないだろう？」

「そりやそうよ、だけど、ちよつとうどんにうる
さい人なら、皆言うわよ、二番茹でが一番いい
って。」

「ふーむ。」

私は感心して唸るばかりだった。

大体、関東の人間は、うどんを蕎麦より一段
下に見る。

蕎麦となると、やれ、どこで獲れた蕎麦を石

臼で挽いたの、小麦粉の割合はどのくらいで、
つなぎは何を使ったの、たれが甘いの辛い、
本返しだ、いや生返しだ、蕎麦屋でお茶を出す
のは邪道だなどと、うるさいこと限りがない。

そのくせ、うどんとなると、腰が強ければう
まいうどんて、あとは、細めか太めかで好み
が別れる程度だ。それ以上にうるさいことはあ
まり言わない。蕎麦を味わうには、もりかけに
限るなどと言っている男が、うどんは鍋焼きが
いいなどと平気で言う。

つまり、蕎麦のように細かいことにこだわる
価値のある対象と見なししていないのだ。

讃岐の人に言わせれば、そんなこと、うどん
に対する冒瀆である。

「うどんはね、冷たい、お蕎麦のもりと同じよう

に食べるのが一番よ。粉の味がよくわかるんだ。
あたしなんか、おいしいうどんなら、何もつけ
なくたっていいくらいなもの。」

おかみは、ぐい呑みの冷やをきゅつと飲み干し
て艶然と笑う。

「あと、醤油うどんもおいしいけどね。」

「え？ 醤油つけて食うの？」

「うん、うどんの上に刻みねぎと生姜を乗せて、上
から生醤油をかけて食べるのよ。五百五十円……」

讃岐は醤油だっっておいしいんだから。」

「あ、そりや、うまそうだな。」

私は、そう聞くなり、思わず叫んだ。

東京のスーパード売っているうどんからは、
想像も出来ない食べ方だが、ここのむっちりし
たうどんに、丸みのある生醤油と生姜に刻みね
ぎ……聞いただけで唾が出て来る。

その醤油うどんなら、これからすぐにでも食
べたいと思ったが、この時間ではもう開いてる
うどん屋はないと言われて我慢した。

悲しいことに、東京に帰るという明くる日の
昼食は、大勢の会食で、醤油うどんは食べられ
なかった。

食事の間、醤油うどんのことを持ち出すと、
地元の人々は皆異口同音に、あれはうまいと言う。
そんなにうまいのなら、食べさせてくれれば
いいのにと、泣きたいくらいの欲求不満を抱え
て飛行機に乗り込んだ。

羽田まで飛んでいる間中、いや、これを書い
ている今でも、

今度、高松へ行ったら、昼に□□のもりを
食って、晩飯に△△の醤油を食うぞ
と、固く心に決めている。

(作家)

仏教とエイズ

——エイズから何を私たちは学ぶべきか——

戸松義晴

東京都荒川区町屋の火葬場での光景。関係団体の代表やアーコスの僧侶が見送る。



写真提供 内山英明氏

男の人は目と口を大きく見開き、その表情には彼の人生の苦しみ、悲しみ、不安が凝縮されているかのようであった。享年三十歳。タイから日本に夢を見て出稼ぎにきて約二年、その結

末がエイズの合併症（結核・髄膜炎等）による異国における死であった。これは台風11号が関東を直撃、大雨で東京もマヒ状態となった昨年の八月二十七日の午後、荒川区町屋の火葬場でお別れの光景である。支援団体の「アジア友好の家」エイズを考える会（吉岡忍代表）から、八月二十六日AYUS（アコス・仏教国際協力ネットワーク）に連絡があり、AYUSのメンバーである若手僧侶と支援者の人々と共に遺骸を焼く窯の前で簡単な葬儀を執り行なった。奇しくも八月二十五日にAYUSのスタディーツアーでバンコク北二百キロのLop Buriという町

にある末期エイズ患者のためのホスピス仏教寺院（Wat Phra Bath Nam Phru）を訪ねた二日後のことであった。

その男性は八月十七日に栃木の病院で入院の必要なしと判断され、引き受け先がなく困っている時に、「アジア友好の家」からの要請で「エイズを考える会」の事務所に運び込まれた。その時の状態は、三十九・八度の高熱、一人ではトイレにもいけないほどやつれ、食欲もほとんどないとのことであった。八月二十一日、やつと都立駒込病院に入院、しかしその翌日には死亡した。十月十六日吉岡忍氏によってタイの姉のもとへ届けられるまでの約二ヶ月間、お骨は私の自坊の心光院で供養させていただいた。いまでも彼の悲しみ・不安に満ちた死に顔はクツキリと脳裏に焼きつき、忘れることはない。

ところで、八月二十五日、タイのエイズホスピス寺院にて出会った同じく末期のエイズ患者の印象について、同行した奥田昭応氏の旅行記に次のように書かれている。

サクデイークラップ、すでに重度のエイズ疾患を顕著にあらわすカリニ肺炎を併発し、おそらく極度の倦怠感が彼を内面から襲っているにもかかわらず、若いその男は大変礼儀正しく、合掌の姿で丁寧に深く頭を垂れ、その表情からは異国の地から突然訪れた風変わりな集団の私たちを、恐れることなく、また人見知りもせず、まるで久しぶりの来客の友人をもてなすかのようにかすかに微笑みながら、穏やかに、優しさをたたえた瞳で気持ちよく出迎えてくれた。彼は今年、十九歳になるという。

私の胸を強く締めつけるのに十分なぐらい彼の歳は若すぎ、その身体は痩せ細っていた。自らの迎えきたる死をも受け入れた彼の表情は、私がいまだかつて出会ってきただ誰よりも、美しく、慈悲深く、優しさで落ち着きと静寂に満ちあふれ、私の心を強く引きつけ、更にときめかせた。(AIDSに病める人たちのためにホスピスとして解放した誉れ高い寺院を訪れて」より)

いったい、東京で悲しみと不安に満ちた表情で亡くなったタイ人男性と、このエイズのホスピス寺院の青年との違いは何なんだろう。

タイのナンプル寺院はバンコクから北へ車で四、五時間、アユタヤの北百キロのロッブブリという町の郊外の小さな村のはずれにある。周囲は山が迫り、豊かな緑に囲まれた静かな所にひ



写真提供・ジャーナリスト 友田博氏

つそりとたたずんでいた。住職アロンコット師は、三十歳代のマハーニカイ派（伝統教団）に属する青年僧で、入山以来十二年その人柄と熱意に十二名の弟子・多くの信者が集まった。オーストラリア留学の後、「The Buddhist Relations Organization for Society」（実際には「International Network of Engaged Buddhist」）の支援のもと、一昨年エイズ末期患者のために寺院を開放し、いまこそ仏教寺院が社会問題に対しイニシアチブを取って動くべきであると主張した。しかし、住職がエイズ患者を受け入れると同時に、十二名の僧侶はエイズの感染を恐れ寺を離れ、他のサンガ派の僧侶も訪れなくなったとのことである。そして現在スタッフは全部で十六名、全員アロンコット住職の信者でボランティアとして患者の介護や賄いに従事して

エイズ患者に開放されているアユタヤの郊外にあるナンブル寺院。



いる。

このホスピスでは、患者に対して西洋医学だけでなく、東洋医学のもつ患者本来の生命力を引き出す治療を続けており、特に残された人生を人間的に過ごせるようにと家族的な雰囲気のもと、精神的な関わり方を強調している。一般的にキャリアが進むと下痢、発熱、肺炎等を慢性的に繰り返し、不安から食欲も減り、気力・体力が衰えてきて寝たきりになる場合が多い。

しかし、このホスピスでは住職の指導のもと、彼らの体調の良い日には身の周りのこと、寺院の清掃や作務に従事することによって、エイズや死に対する不安を軽減し、周囲の人間、自然などに接することによって差別や孤立感から離れて、患者が人間的な暖かみのある環境で人生の最後を安らかな状態で送れることを目的とし

たものである。

玄関わきのソファにやせた体を横たえていた少年は、

家族からも捨てられ、病院では医者も看護婦も僕を怖がって触ろうとしなかった。皆からおまえが悪いことをしたから自業自得のことだといわれつづけ、自殺を何度か試みた。ここにきて初めて、人間として扱ってもらえたし、仏教の教えの本当の有難さと生命の大切さがわかった。これからは少しでもエイズになる人が少なくなるように、多くの人々に自分の体験を伝えていきたい。

彼は弱った体に松葉杖をついて、町の学校等に出向き、若い人々にエイズの恐ろしさと生命の尊さを伝えるために、死期を早めることを承知の上でボランティア活動に従事している。住職

のアロンコット師は、「なぜ仏教寺院をエイズ患者のためのホスピスとして開放したのか、医者ではなくてなぜ僧侶がケアするのか」という問いに対して、

タイにおいては仏教は非常に深く社会に根づいており、人々の生活と寺院は密接に関係している。エイズは深刻な社会問題であり、僧侶こそがエイズ患者を精神的にも肉体的にも仏教の教えるところの慈悲と理解とに基づいてケアするべきである。なぜならば、患者達は家族から、社会から見捨てられ、死だけでなく孤独感で苦しんでおり、僧侶は身をもって患者と非感染者とが一緒に生きてゆけることを特に家族の人々に示し、差別のない社会を築くことの大切さを説く責任がある。



写真提供・ジャーナリスト 友田博氏

と少年の細く、カポリジ肉種で腫れた腕をさすりながら静かに答えられた。

現在、人口約六千万人のタイでエイズ感染者は推定五十万～六十万人といわれ、このまま放置しておくとい世紀末には三百万人になるというのが識者の一致した見解である。保健省の発表によれば一九九一年十月には感染者は三万二千八百人であったが、爆発的に膨れ上がった理由のひとつに、徹底した検査体制が挙げられる。約九十万人といわれる性産業に携わる女性の積極的な検査を行ない。感染者の実数を推定することができたようである。そして現在では、小・中学校の教科書、テレビや新聞・雑誌といったマスメディア、そして風俗店を一軒一軒回つてのレクチャーやコンドームの無料配付と、政府の対応は目を見張るものがあるが、依然として

閉鎖的な村社会では差別感が強く、前述したように多くの場合がエイズ患者が家からでるとその家の家族まで差別を受け、さらに因果応報の考え方で捉えられるため、患者は家を出ざるを得ない、または家族にも言えない状況を作り出してしまふ。さらに感染者の社会的背景をみると、農村出身の低所得者層、家族を支えるために売春婦になった少女達が注目される。最近特に問題になっているのは、山岳民族・隣国のミャンマーや中国の雲南省から親が借金した三万〜十万円を返済するために人身売買され、強制的に連れてこられた上、一歩も売春宿から出ることを許されない低年齢少女達（十二〜十六歳）である。警察から救出されて検査を受けると、九割はエイズに感染しており、借金と生命を引き換えにして自国に送り返される。昨年、タイ南

部の漁村で救出されたミャンマーの少女達（十二〜十五歳）二十三名が自国に戻った後に、政府の収容所にて毒殺されたという大変悲しい記事が新聞に掲載された。感染源になることを恐れてとのことであるという。家電製品や家を修復するための代償としてはあまりにも大きく悲しすぎる。

日本におけるエイズの現状は、エイズサーベランス委員会の発表によると、血液製剤による感染者を別にして、約千三百人くらいの感染者・患者がいるという。このほぼ半分が外国人になつていて、現在の風俗関係の様子をみれば、その多くがタイの人々を含めたアジアからの人々であることは容易に想像がつく。

「エイズを考える会」代表の吉岡忍氏が、

日本のエイズ問題は、在日外国人、とくにア

アジアの人々、タイの人々を抜きにはできないし、この問題が今後の日本のエイズを考えるとときに最も大きな問題になるであろう。

と言っているように、約三十万人といわれる不法残留者(VISAの期限が切れたということ)の大半を占めるアジアの人々の問題でもあり、日本とアジアとの問題でもある。資格外活動、不法残留、出稼ぎ、3K労働、売春、人身売買、麻薬等、決してプラスイメージとはいえない言葉で語られる彼や彼女たちの置かれた劣悪な生活条件と今回のタイの人の死が示したような社会制度の不備が、エイズ問題への取り組みをいっそう困難にしている。外国人労働者の人々の従事する3K労働によって支えられている私達の日常生活、また母国に家族を置いて危険を伴う仕事に従事しなければならない彼や彼女らの存

在を、ただ「貧しいからかわいそう」という表面的な捉え方だけでなく、なぜ彼や彼女達が日本にいいのかという問いを日本社会の問題として主体的に考えていかなければ、「エイズにかかったタイの人は追放しろ」とか「日本に入れるな」というような短絡的な悲しい結論になっていって、それだけでは、行政も日本社会も日本人もエイズの問題に対して真剣に動かないのではないだろうか。

今回のタイの人の死を通してエイズを社会的文脈の中で考えていくと、それは医療の問題だけでなく、経済的な貧困という「因」すなわち経済問題でもあり、日本とアジアとの関係の問題でもあり、彼の死は日本経済・社会システムの「果」でもあり。また差別を生みだしやすいという点では道徳的・人権問題でもあるといえよ

左端に見えるのがエイズ末期患者。もう手のほどこしようがない。



う。さらに、私の問題として考えてみると、無意識のうちに外国人の人々の低賃金、危険を伴う3K労働の恩恵を受け、それを享受してきた自分の生活を反省して、法然浄土教に縁をいただいた一人として、法然上人がなぜ念仏の一行を万人救済のための教えとして選択したのかを主体的に問い、万人救済ということや念仏を理念や形式的に受けとめることなく、社会生活の中で形に表わすべく努力をしなくてはいけないということをエイズの問題から痛感した。そして、これからも積極的にエイズの問題、日本とアジアとの関係等に取り組み、また、一人でも多くの人々と共にエイズ感染者の苦しみを分かちあうことができ、エイズによってひきおこされる悲しい出来事をくり返さないように力を合わせて行きたいと思っている。(東京・心光院住職)

Kさんとの対話から

藤木雅清

写真―落合泰三



二年前、都内のある病院のホスピス病棟に八十歳ほどの男性患者Kさんを訪れました。この病院は、カソリックの教会が運営しており、神父さんが定期的に病室を巡回したり、シスターが

外来受付で案内係をしたりしている病院です。ですから、どの病室にも壁に十字架が掛けられており、クリスチャンであれば毎日そこに向かって祈ることができるのです。そんな環境の

病院に僧侶である私が呼ばれたのは、Kさんの「ワシは、あの十字架というのがどうも性に合わない」と主治医（仮にY医師と呼びます）に訴えたからでした。

Y医師と私は、終末期医療の問題など、さまざまな活動を通じての知り合いでした。彼の以前勤務していた病院で、彼自身が主宰する〈院内ターミナルケア研究会〉に私が話しに行ったり、私たちの月例会で彼が講師を務めたりしていました。Y医師は、Kさんの訴えに対して、私に臨床訪問を依頼してきたのです。それは、Y医師が念願かなって地方の公立から都内の病院のホスピス病棟に医長として移ってきて、七日目のことでした。

臨床訪問するにあたって、私が予備知識として聞かされていたのは、本人はがんであることを知っている。病状経過は、ホスピスに入っては

いるが終末期（予後が三ヶ月とか六ヶ月などと定義されている）というわけではない。がん発生から数年を経ており、恐らく予後は年単位であろうということ。本人が仏教の話を聞きたがっているという、この程度のことだけでした。ですから、冒頭に「八十歳ほどの」と述べましたように、正確な年齢はついにわからないままでした。

しかし、この、あまり予備知識をもたなかったということが、かえって余分な構えをせずに行われたように思います。Kさんの状態にもよりましたが、一回の訪問は平均して一時間半くらいだったでしょうか。最初の訪問から亡くなる日まで十ヶ月と十日、亡くなった二日後の訪問が、ちょうど二十回目でした。

この間、話したことといえば、八割はたわいもない世間話でした。二人には、野球選手だったこと、ヘボながら囲碁が好きなことという共

通点があり、Kさんの郷里S市は私の親友の寺があつて、その周辺のことは私もよく知つてい
るというような事情から、状態のいいときには
話題には事欠きませんでした。軽妙な語り口で
話題の豊富なKさんとの会話は楽しく、思わず
立場を忘れてしまうほどです。一、二度、話し

の流れのなかで「お生まれは何年でしたっけ」
と私かとぼけて聞いても、「さア、いつだった
ですかねエ」などとはぐらかされてしまいます。
それでもときどきK家の墓地のこと、家族の
こと、仏教教義に関することなどをフツと切り
出してこられました。Kさんの家族は、三人の



息子さんと末の娘さんの四人の子がいて、それぞれ所帯をもっていますが、Kさんのお通夜の弔問の日まで、顔を合わすことはありませんでした。奥さんは同じ病院の別の病棟に入院しており、毎日のようにKさんの病室を訪れているとのことでしたが、奥さんにもついにお会いす



ることはありませんでした。そのほかにも、とりとめのない話しの合い間合い間に「死について考えるんだけど……」「仏教では死のことをどう考えていますか」などという核心に触れる間いかけが数回ありましたが、そんなときは、私の考えているままのこと、私の受け取っている

ままの仏教観を真剣に話しました。

そんなKさんとの関わりでしたが、本来的な私の立場からいえば、異質だったかもしれない。といいますのは、私は一人の患者さんをケアするチームの一員として依頼されたのですが、報告を求められたのは第一回目ときだけでしたし、それも報告を求めるといふより「ご苦労さまでした」という私への慰労の言葉のなかで、「どうでした」という聞かれ方でした。そのときの私は、Kさんの病気の状態や家族構成、病歴、ケア体制など、聞いておきたいと思っていたことは何も知らされませんでしたし、「私もチームの一員として呼ばれたはずなのに」という違和感を感じていました。

私はKさんを訪ねて病院へ行くときは、まず看護婦控室（主治医の居場所でもある）へ顔を出し、「Kさんのところへ来ました」といって

から病室へ行くようにしていたのですが、Y医師とO婦長（他の病院スタッフはついに一人も紹介されないままでした）が不在のときには、若い看護婦さんに一般面会者と間違えられたり、誰何されたりというへんな存在のボランティアでした。

チームケアという観点からいうと、医療スタッフの側も例外的なチーム員である私の扱い方にとまどっていたために、こういう状態を招来してしまったのでしたが、そのこととは別に、特殊な立場としてのメリットもたくさんありました。天気の良いときには、院内に咲き乱れる桜見物と洒落込んで、車椅子を押しての二人だけの散歩をしたりしました。そんなとき、よくKさんの口から語られるのは医療スタッフに対する不満でした。私が、他の医療スタッフとは少し立場が違うということを、Kさんも薄々感

じていたからでしょう。

郷里のS市へ帰りたいのに外泊させてくれない、痛みや不快感を訴えても何の処置もしてくれない、などという不満です。私がそれを婦長に伝えても、まったく聞き入れてもらえません。もちろん、病院には病院の、スタッフにはスタッフの都合もあることでしょう。しかし、患者さんの訴えや希望に対しては、無条件で「ダメ！」という前に、どうしたら可能になるかという努力はすべきです、不可能ならばなぜ不可能なのかということ、患者さんが納得できるように説明すべきだと思います。

S市の家に帰るには、連れていく人と付き添いがいなければダメだというので、「私が運転して連れていくから、病院スタッフかボランティアの人を一人付き添いにくれば可能になる。もう病気の進行状態からいっても、これ

が恐らく最後のチャンスなのですから」と申し出たのですが、ついにOKは出ませんでした。

Kさんの場合、もう症状のコントロールしかすることがないので。治療して回復していく患者さん（だからといって意思を蹂躪していいわけではない）ならば少しは時間的な猶予などがあるかもしれませんが、Kさんにはそんな余裕はなかったのです。ましていわんや、ホスピスを標榜しているのですから、せめて患者さんの意思の尊重ということをもっと重要視してほしいと感じました。

終末期医療のポイントは三点です。すなわち、病気についての正しい説明（病名告知）、十分な説明を受けたうえで納得した同意（インフォームド Consent）、そしてどんな意思表示をしても人格を尊重されたケアが受けられる（ホスピス）の三点です。このことについて考えていき

たいと思います。

病名告知（とくにがんの告知）については、いつもかまびすしい議論がされていますが、実際のところ、わが国で告知が行なわれているのは二、三割といわれています。賛成派・反対派、推進派・慎重派などといわれるように意見が二分し、それぞれにそれぞれが主張するに足る理

由があるようです。自身のときは「告知してほしい」が七割ほど、家族のときには逆に三割程度というのも、いろいろな調査に共通している結果のようです。そんななかで、メリット・デメリットを掲げたりするケースバイケース派という人も少なくありません。しかし、筆者が思うに、どんな理由があるにせよ、多くの現場で



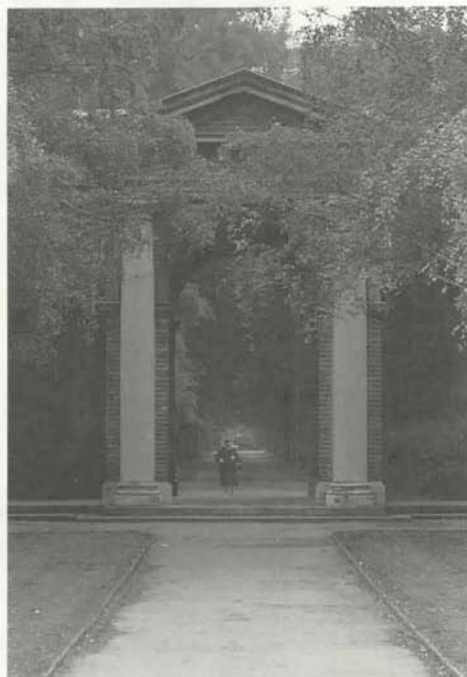
なされているような医師が告知しない、看護婦はじめ家族などの周囲の人が皆で隠しとおすことの不自然さ、残酷さは、どれだけ理由を並べてもおかしいのではないだろうか。「患者さんのため」などという言い訳がよくされますが、嘘をついているのです。嘘のあるところには、コミュニケーションもありませんし、いわんや

信頼関係など成り立つはずがありません。そうやって周囲の人たちから嘘をつかれ、嘘であるから患者さんが最も関心をもっている死のこと、人生の終焉のことなどについて語り合うことができず、「何を気の弱いこといつているの。頑張つて」などといわれながら、からだは一向によくならず、寂しく亡くなっていく患者さんを



多く見えています。そして、告知なくしては、これからお話しするインフォームドコンセントもホスピスケアもありえないのです。告知問題は、

そのこと自体がもっている問題よりも、人生の終焉を迎えるときのいろいろな選択をする、その入り口の問題として重要なのです。



そして、インフォームドコンセントです。これは十分な説明を受けたうえでの自己決定です。ここで重要なことは、たとえどんな決定をした

としても、その意思は尊重されるということですね。「手術を受けます」という意思は尊重されるが、多少死期が早まっても自宅で死にたい、

あるいはホスピスで最期の時を過ごしたいという意思は、尊重されないということであってはならないのです。

たとえどのような意思決定した人であっても、等しく人格を尊重されたケアが受けられる、これがホスピスケアなのです。

先ほど、告知の問題は、終末期をどのように迎えるかを考えるうえでの入り口の問題だと述べましたが、わが国では、ホスピスに入所している患者さんでさえ、告知を受けていない人が少なからずいる、というのは驚くべきことです。

先日、ある作家ががんで亡くなりました。この人は、ホスピス運動に熱心に参加しており、自らもホスピスのボランティアとして活動していました。そして、そのボランティア体験記を出版し、そこで展開される愛にあふれる人間ドラマを紹介していました。しかし、ご本人はご

く一部の人にしか知らせず、遠隔地の病院で手術をし、亡くなりました。

ご自身がどのような最期を迎えようと、それは他人がとやかくいう問題ではありません。どのような時期に、どのような迎えをいただくかは、私たちの計らいを越えたことです。しかし、ご自身はホスピスでの死を選ばなかった。ご自身のホスピスでの体験を、こんなにホスピスというのはすばらしいところだという角度で書いたあの本には、嘘があったのです。むしろ、ご自身は、嘘のない、自分の望んだとおりの生き方を貫いたといったほうがいいかもしれません。

私は、もし自分でホスピスをつくるなら、そこで死にたい。そういうホスピスをつくりたい。

この医師の言葉に、嘘のない生き方を感じ、共鳴しました。

(死の臨床研究会会長)



●「生きる」をご執筆いただいた千葉勇作氏は仙台市青葉区在住の日本画家です。ご自身は田舎の小さな宿屋の家族を継ぎ、レストラン、クラブなどを経営しましたが無教養です、という言葉が原稿に添えられていましたが、本年の絵入り年賀はがきのデザイン・コンクールに選ばれたり、地元新聞二社から元旦用の巻頭の日本画を依頼されたり、といった八面六臂の活躍をされたなかなかの人物です。申し遅れましたが今年の「浄土」の中心テーマは「生きる」で、生きとし生けるものの生きる楽しみ、苦しみ、哀しさなどが読む人の胸に訴えてくるような文章の内容をお願いしています。千葉氏は副題として「これからが本当の青春」か「がんに負けてたまるか」を申し出られましたが、これは読者である皆さんに選んでいただきたいと思っています。

●一月十日の教育テレビ「立花隆・対論1994①―臨死体験と宗教をめぐる」は昨年本誌にもご登場いただいた宗教学者・山折哲雄氏との対談でした。内容を概略すると、従来の既成宗教で現代をフォローすることはできないが、しかし、科学的説明だけでは解決できない問題もあることは確かだ。そして、宗教がよりよい臨死ビジョンを見るためにある、といったことでした。今月の臨死問題研究会会長藤木雅清師の一文も、そうした問題への提言としてお受けとりいただきたいと思っています。

●法然上人鑽仰会が発行する「浄土」にしては、法然上人に関する内容のものが少ないのではないかと、といったご意見が私の耳にも届いてまいります。しかし、昨年も何回か記しましたように、私どもは論文集や同人雑誌を作っているのではなく、発行元はともあれ基本的には万人に愛読していただくための雑誌作りに目下のところ全力を傾注しております。まず、気軽に、誰にでも読まれる雑誌を作り、その結果として我々が法然上人の思想や業績を文字どおり鑽仰する気持ちが少しでも高まれば、といったそんな気持ちでいるのです。

●今月号から本文を六十四頁に増頁いたしました。限られた予算ですが、今月号は紙質も変わりました。編集に携わる全員が寺役を持っておりますが、精一杯頑張っておりますので、どうぞよろしくご鞭撻くださいますようお願い申し上げます。

(編集チーフ・小川有順)
編集スタッフ

栗田順一
齋藤晃道
細田芳光
大室照道
太田正孝
長谷川岱潤
村田洋一
石上俊教

●お知らせ

本誌をまとめで購入希望の方は、一〇部以上を単位に法然上人鑽仰会までお問い合わせください。頒価その他について詳しくご説明申し上げます。なお、四月号以降の分も残部が少々ございます。

●お願い

本誌「浄土」への投稿は随時受け付けております。ただし、採否に関しては編集部にご一任ください。また、原稿は原則として返却いたしませんので、必要の方は必ずコピーをお取りの上お送りください。なお、採用させていただいた分には規定の稿料を進呈いたします。そのほか、ご意見、ご希望がありましたらご遠慮なくお寄せください。特に締切日は設けておりません。

編集部

浄土

六十巻 二月号 頒価五百円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成六年 一月二十五日

発行 平成六年 二月 一日

編集人 宮林昭彦

発行人 牧田諦亮

印刷所 株式会社文化カラー印刷

写真植字 文化フォトタイプ

〒一〇五 東京都港区芝公園四七四 明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三(三三七八)六九四七



SAPPORO

私たちは味わいライフを追求します。

うまい、うまいで、カロリー半分。 自信作〈カロリーハーフ〉



サッポロ生ビール カロリーハーフ

飲酒は20歳をすぎから

●ご協力をお願い：自動販売機による酒類の販売は、午後11時から午前5時まで停止されています。

サッポロビール株式会社

すっきりが、いい。 新しいローレルと、日本。



Photo:ローレル 25 ツインカムメダリスト (オプション装着車)



松方は、**こ**りゃあいいと思った。
◎本木は、**なる**ほどと感心した。
松方・本木の**新**ローレル評判記。LAUREL誕生。



松方:直線的なスタイリングが新鮮。こんどのローレルは端正だ。本木:キャビンがゆったり、視界も広い。すっきり運転できる。

ローレル 25 ツインカムメダリスト.....全長4710×全幅1720×全高1380(mm)/主な装備●RB25DE(6気筒ツインカム・総排気量2498cc)エンジン●最高出力190PS/6400rpm(※NET値)●最大トルク23.5kgm/4800rpm●フルレンジ電子制御5速オートマチック●電子制御パワーステアリング●オプションーフフオートエアコン●ローレルサウンドシステム(※NET値)とは、エンジン車を単独に搭載した状態とは異なる条件下で測定したものです。
●日産自動車株式会社お客様相談室:東京Tel.(03)3545-2323/札幌Tel.(011)722-8823/名古屋Tel.(052)951-8823/大阪Tel.(06)536-1123/福岡Tel.(092)451-8823.....お近くのローレル販売会社へ